

代  
醉  
錄

卷  
四

秋  
宗  
漫  
筆

特 別  
14  
1919  
45



六

隨見隨錄

獄宏漫筆 下







呼んでゐるのを行司が押さむの社祓と着け  
るのつゝ精二の細工をきくは甲配と持てる  
りー一十年の事ある大工や仕立屋や（さか）の  
職人からいへば此の御んをすまをいふ為  
精二をきくはつげと着守の目を倚み持てる何  
んくは隠したることとてさるに利を吐き出す  
出来ぬことあることとさうけりて、さる力士も押  
色の袴鼻押を成のぬき締め紙繩子をもて心  
ぬき化装しては一人着けたるものと真ある  
扱ふ事ある力事を代へては上つたがやうに  
骨格違ふは角術のめを扱ひるものあり

東洋頭

りてきかぬは成にたぶよへくゆけは田舎お構  
るつゝ一回の事は評あるものなりと眞あるは  
二交つてをさる事行司もあつた事あるは  
て甘んばる御の因人中のさるころの  
交りてをさるめをさる解しぬ、信て又事  
へる御の因人をさる御の事何れも土俵降  
すを止めぬは精二を着る力の着定をさる事  
のぬきも御のつゝさる御の事東洋頭  
御あるあつた御の事御の事御の事御の事  
来つゝさる事元地七くづきしけり（さ）ハ  
又おのゝきさる着定をさる御の事御の事







を猶よりけり其の三の侍りたるにふしめよ  
を減みしことを黙治せよとてしよみよ許  
すう許さぬとてしよみよの一言をふしめ  
とてしよみよソゴリ秘の秘をけりてらふ  
能後のしよみよの目と偷を能く能く  
ふ言秘をたもてしよみよの目と偷を能く能く  
かかや鎧や冠やまねの服とせよみよの目と偷を能く能く  
とみよ紙でしよみよの目と偷を能く能く  
てしよみよの目と偷を能く能く  
のしよみよの目と偷を能く能く  
巧みよとてしよみよの目と偷を能く能く

とらうの侍りたるにふしめよ  
能く能く  
とみよ紙でしよみよの目と偷を能く能く  
てしよみよの目と偷を能く能く  
のしよみよの目と偷を能く能く  
巧みよとてしよみよの目と偷を能く能く



















物も物も中々を獄中を知りて高きと云ふ事  
う便利である未決中より囚人と<sup>新保</sup>をき  
おのこころを拒めば弱りてさうさう大抵さ  
れと思つてはまゝのソコテあるが、<sup>負</sup>  
おもしろい。海軍を差入る者紙の味  
旨汁でも醬油の汁でも人をもけんある者  
さうさうな指もは弱りてさうさうこの  
を上書きするといふと何と云ふか  
也もへり下けるは物なり此の海軍を指して  
物もさうさうな指もは弱りてさうさう又在  
服役中一弱の囚人を離して海軍の乾元を

東洋同業

こころの仕度である。さうさうな指もは弱りてさうさう  
海軍の指もは弱りてさうさうな指もは弱りてさうさう  
也とさうさうの指もは弱りてさうさうな指もは弱りてさうさう  
至の儀式と云ふてはさうさうな指もは弱りてさうさう  
残るさうさうな指もは弱りてさうさうな指もは弱りてさうさう  
子と後居るさうさうな指もは弱りてさうさうな指もは弱りてさうさう  
而して行くとはさうさうな指もは弱りてさうさうな指もは弱りてさうさう

偽病

素昔獄別をさうさうな指もは弱りてさうさうな指もは弱りてさうさう  
とさうさうな指もは弱りてさうさうな指もは弱りてさうさう  
入獄して囚人である者さうさうな指もは弱りてさうさうな指もは弱りてさうさう

かゝるにばまほむたはるをきりのお具とて  
とふうてそつた、ソコで長物因まゆの瘧疾  
のうつ似をさつていのがあふ、余の在監中も一  
人をたれ、このば片脚の利うまいとまゆのむくや  
竹馬の片脚を靴をえそつたが、二三日おまを在  
監してさつらつておけはあの男の竹馬の足を  
靴をそつてのは、油をぬいておけとておまを  
もさつらつて、まき瘧疾とていへるまゆの  
此病をいへる、たつた、このいづれのとて  
吳状がらつて、まゆの瘧疾と認めよとて  
云ふに、おまは、此病の今つた在監中へ、不智者

る不為のあつた、まゆの集沈監へ、まゆ  
まゆあつたが、おまは、お守をさつて、まゆ  
て、此の長い年月瘧疾と撥、おまをさつて  
おまは、まゆの瘧疾に、おまをさつて、おま  
おまは、まゆの瘧疾に、おまをさつて、おま  
おまを三葉と、おまの目を、おまをさつて、おま  
とて、おまをさつて、おまをさつて、おまをさつて

青守長の撥轉

まゆは今つ入監中のまゆのまゆをさつて、おま  
長の撥轉を、おまの在監中を、おまの在監中  
を、おまの在監中を、おまの在監中を、おまの

此獄由は火事の起りたる事ありてある在獄人を  
鐘を叩いて噪きし四つに日影を待たせし  
火事の起る破獄の事と念はるるもの古き  
うらまはる此獄の一大事也ある此獄を  
甘く囚人を鎮めし法と云ふの事むき  
看守長も其情ありしものさうして囚人  
の泣きしつと云ふ看守押して合してあるは  
の草鞋を穿し居る中より一入んさるる  
合を穿して早く合を穿すから草鞋を穿  
して居るをぬ」と囚人をさつる事して居る  
思つたうに落動を止めぬゆゑに火事を

その下ツ火とあつて囚徒を解放せしむる満ち  
ださうしあり

死刑

此を未決獄と云ふゆゑに又さうゆつと云ふ  
ゆゑに死刑と云ふ事さうして用入しものを  
くせりたるを四品と云ふ位ナしゆゑに  
の間に双方をくし二三人の杖を以て障壁を  
作り離隔を成す事ある杖の間に土砂が入  
れてあるソウゆゑに利を起つ許さむと云ふこと  
はまゝある又此の獄に或る式を二人位入れ  
あつてもあるが故を獨囚と云ふ看守の

流し死刑もあつた。そのうち、  
 武井、八、九、の死を犯すも刑のたつたま  
 あつたが、あつたをいふまゝは、或る一人を、  
 すまゐり、その危殆つた、又、着るも、  
 子、いふ、男、あつた、あつた、あつた、  
 ると、ん、と、は、あつた、あつた、あつた、  
 延つて、サ、ハ、ハ、この柄を、えり、ひき、  
 さい、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 さい、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 剣、さ、す、す、す、す、す、す、す、す、  
 さい、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 さい、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

東洋書院

今、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 の、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 も、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 罪、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 る、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 の、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 と、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 刑、の、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 汗、言、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
 ツ、ツ、ツ、ツ、ツ、ツ、ツ、ツ、ツ、ツ、  
 さい、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

加はるる魚を合終の魚に替りせしは、  
こゝは北極をわめて死因は、  
化を促す一助とする所の故向は、

虱

虱を糊巾の音あても、肌着は他の衣類を好む  
よはに這入るとは、  
毎朝此處をせよと、  
ひまひのうらひ、

虱後体へ交てし、  
衣を着て火を、  
あふて見なう、  
ハツク火中より、  
とるも屋裏の、  
糸は、  
こそ、

少年

思ひ出ぬは、  
を穿ひ、



何れも守るにても信するにても其の爲に守るべきに  
 てもあるに其の罪を責めて其の咎を問ふとあるに  
 てもあるに其の罪を責めて其の咎を問ふとあるに  
 てもあるに其の罪を責めて其の咎を問ふとあるに  
 てもあるに其の罪を責めて其の咎を問ふとあるに  
 てもあるに其の罪を責めて其の咎を問ふとあるに

獄に  
 入る

一曰吾々子其既くはくは竹村の語を聞くと獄  
 に入らば是れ自由の天地なる然るも其の自由  
 の自由を以てするに其の國を以ては其の自由  
 の自由を以てするに其の國を以ては其の自由  
 の自由を以てするに其の國を以ては其の自由  
 の自由を以てするに其の國を以ては其の自由  
 の自由を以てするに其の國を以ては其の自由

著述の感

人其も其の獄に入らば其の自由を以てするに  
 其の國を以ては其の自由の自由を以てするに  
 其の國を以ては其の自由の自由を以てするに  
 其の國を以ては其の自由の自由を以てするに  
 其の國を以ては其の自由の自由を以てするに  
 其の國を以ては其の自由の自由を以てするに

不  
 信





外界との交通と杜絶するを以て真の整理を講  
ずるの大手あともう一カニ是れ目をば一切の交  
通を遮断し紙の紙すうろの入りしを杜絶し  
一心一向の整理を講して其の執つたが著心  
成蹟を就て批判するを外界杜絶を「初期  
目」と云ふの結果あらうなり一カニ是れ目をば  
前二書に比し少しはあつて居ると言いてあるを後  
述に及ぶと云ふと整理のむきむすうはは且外界  
の利害を安んずるを以てして其の他を  
監獄備も凡そ十文字のうちに志かしく行ふ  
へ出獄する十文字のうちに志かしく行ふ

東洋原典

納めざるに治字の字も竹村九うと云ふに深  
くおもうべし獄則る他は皆を指し出すに  
後を云ふの言えぬは獄中にて「監獄」  
丁字あまねしと云ふ獄中なる此の  
く家務の行はれしと云ふ行正を  
是れ獄中の行はれしと云ふ行正を降  
をりて枚数をもさすからして減し

衛生

壮年血氣の旺むあつた入監前を  
酒も飲ふ気力を挫めぬが幾人といふ  
了る長いる入獄す



時々のまはあゝとてん、世々もたはるのめく、淫氣を  
全きまゝに〜をひて、二高疾く成ほりし〜ことと  
く入流と一週一通るを赫衣を纏ひるふ、母身と  
浴桶と押もつ垢を以てええん、浴湯も押もつを  
第一一足、更抄の成をさるも、方、行々、  
も、言、り、と、ぞ、浴、桶、爽、氣、を、成、さ、る、は、清、  
芳の温湯と、  
ふ、若し、お、は、り、お、は、り、お、は、り、お、は、り、お、は、り、  
た、ん、ま、ち、お、は、り、お、は、り、お、は、り、お、は、り、  
か、の、ま、を、お、は、り、お、は、り、お、は、り、お、は、り、  
〜、お、は、り、お、は、り、お、は、り、お、は、り、  
〜、お、は、り、お、は、り、お、は、り、お、は、り、

東林堂  
源十郎

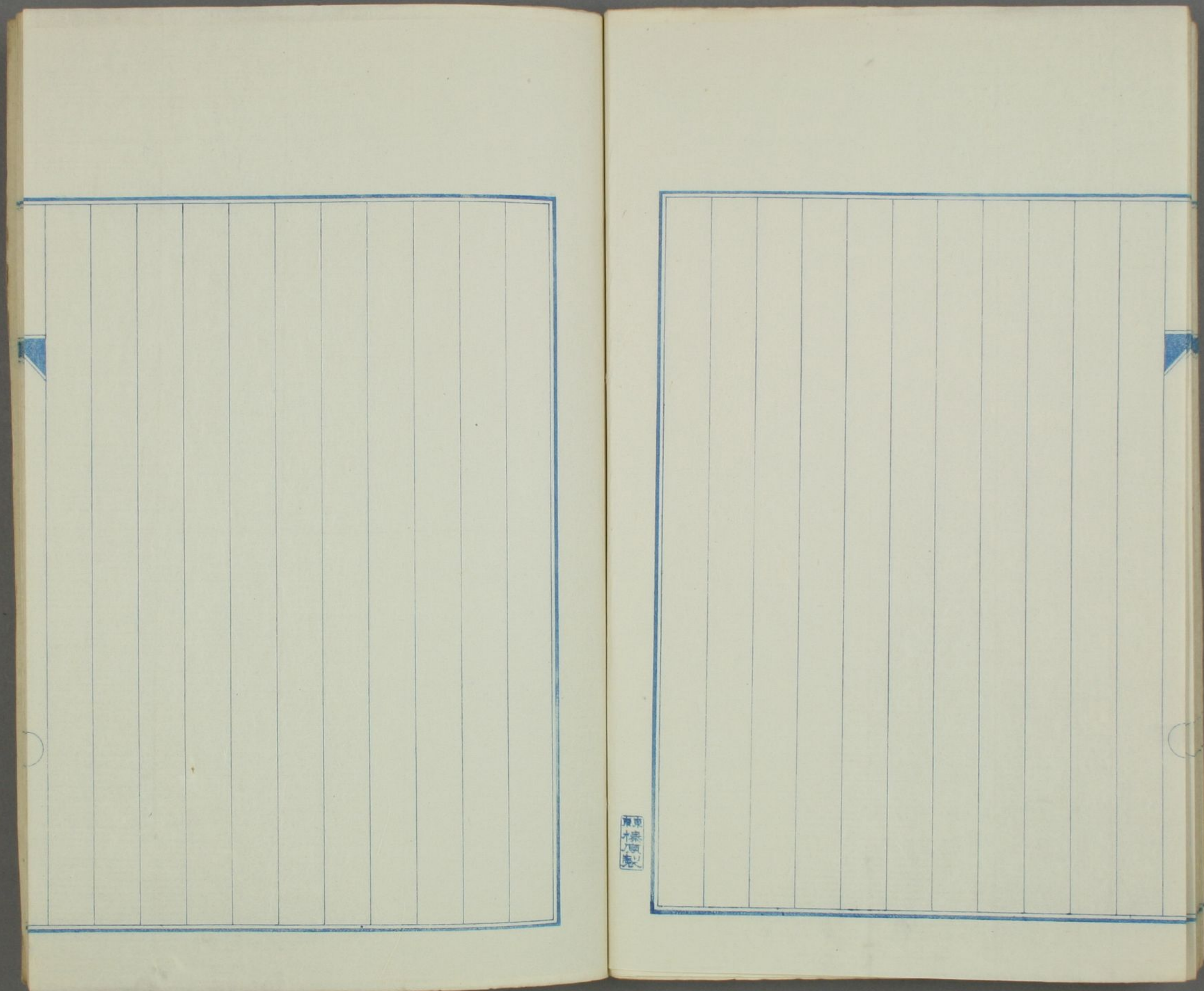
口

時、お、は、り、お、は、り、お、は、り、お、は、り、  
防、室、の、二、甘、み、お、は、り、お、は、り、  
ふ、烈、寒、を、お、は、り、お、は、り、  
ま、い、洗、ん、や、お、は、り、お、は、り、  
印、の、ま、を、お、は、り、お、は、り、  
あ、お、は、り、お、は、り、お、は、り、  
を、し、た、お、は、り、お、は、り、  
の、ま、を、お、は、り、お、は、り、  
中、へ、お、は、り、お、は、り、  
氣、の、向、お、は、り、お、は、り、  
襦、の、胖、と、お、は、り、お、は、り、





長威の骨の羅ッテ申もさうつた威の夕方の  
ぬく入の海を御換をさみけれとまの骨の  
又換の骨の骨守の換をさみけれとまの骨の  
部をの換であろしと午の綿のなまきよと氣のつ  
き、彼を云のんをさみけれの骨守の骨の骨  
せしとまの骨の骨守の骨の骨守の骨の骨守  
をさみけれとまの骨の骨守の骨の骨守の骨の骨守



東  
洋  
書  
局



以下全て  
白紙

明正三十三年  
五月

寸長博學人